

第 5 回

円山動物園リスタート委員会

会 議 録

第5回 円山動物園リスタート委員会

- 1 日 時 平成18年10月26日(水) 13:30から16:00
- 2 場 所 円山動物園 動物園プラザ
- 3 出席者 委 員：大谷薫、岡田典子、きくち美由紀、小林廣司、高木晴光、服部信吾、原はるみ、原田昭、山本光子、笠康三郎

事務局：円山動物園園長、種の保存担当部長、管理課長、飼育課長 ほか
- 4 議 事
 - (1) 構想案の策定に向けて
 - (2) 次回議題と日程調整

1. 開 会

原田委員長 それでは、ただいまより第5回円山動物園リスタート委員会を始めたいと思います。

きょうは、オブザーバーの方もたくさんいらっしゃるようです。

金澤園長 きょうは、大川委員、小宮委員、斉藤委員が欠席になります。それで、山本委員がおくれて来られる予定です。それで全員でございます。

続けて、資料の確認をさせていただきたいと思います。

お手元に資料を配付させていただいております。資料3は事前にお送りさせていただいておりますので、これは目を通していただいているかと思います。それから、きょうは資料1と2がございます。そのほかに、追加でA4のいっぱい字を書いたものがありますが、これは、資料2のアンケートに自由で書き込める欄がございますので、それをまとめた表でございます。したがって、資料1、2、3でお話をさせていただきたいと思います。

以上です。

2. 議 事

原田委員長 ありがとうございます。

それでは、早速ですけれども、きょうの議題の一つは、ごく先日なのですが、スウェーデンでデザインの国際会議がございまして、その会議の後に、札幌のように寒い国の動物園がどのようなことをやっているのかというのを見てまいりました。場所は、スウェーデンのイエテボリというところから北へ向かって車で2時間半ぐらいのところですが、ノルデンスアーク(Nordens Ark)というところがございます。

それで、その動物園がどんなものなのかというのをこれからごらんに入れまして、今まで第4回までこのリスタート委員会でディスカッションされた内容、それから動物園サイドからも構想案が出されておりますが、その構想案の中身等々を検討いたしまして、一応、私なりにこのように考えてはどうかという案をつくりました。まだ、そんなに深いところまではやっておりませんが、考えたものをごらんいただくと考えております。

第3回のときに、私案といたしまして、いわゆる生物多様性を基盤として再生計画をつくってはどうかというご提案をいたしましたけれども、内容については余り細かい話をしませんでした。そこで、きょうは、このような方向でというふうに幾つかの要点を絞りまして報告をさせていただきたいと思います。

まず最初に、スライドを使いまして、ノルデンスアークという動物園のご紹介からしてまいります。

スウェーデンのノルデンスアークの場所は、北緯58度です。札幌が北緯43度でございますので、大分北になるのです。寒いところでございます。そういう動物園が冬場も休むことなくオープンしているということですが、どんな動物園なのかをこれからごらん入れたいと思います。

ノルデンスアーク動物園は、こういうリアス式の海岸沿いにありますが、この一番端っこなのです。スウェーデンはこのような形をしています。

そういう動物園でございますが、地形図でいいますと、このグリーンのところ、これが動物園としてビジターに開放されている部分でございます。ここが約50ヘクタールです。参考までに、円山動物園をここに示しておりますが、円山動物園は22.4ヘクタールなのです。ですから、これからごらんに入れますものの2分の1弱になります。

ノルデンスアークは、年間10万人ぐらいの入場者です。円山動物園は、先月末で昨年の六十数万人に達したということでございますので、入場者は円山動物園の方が格段に上ということになります。

実は、ストックホルムにスカンセンという博物館がありまして、その中に動物園が入っているのですけれども、そこは伝統的な動物園です。ノルデンスアークの入り口はここなのです。これは、実はホテルと動物園の本館が入っているところで、こっちの建物がいろいろ研修などを行う施設になっております。こういうものが主な建物でして、あとは延々と森が続いている、そういうところでございます。これは、大きな駐車場が用意されております。入り口には管理施設と宿泊施設がありまして、売店等もここに入っております。

駐車場には、余り風がなくてはためいておりませんが、財団の寄附企業、協賛企業の旗があるのです。この動物園は協賛企業によって支援されているということをきちんと主張しているわけです。

中に入りますと、こういう研修用の大きな建物がございます。

この人が、レナ・リンデン(Lena M. Linden)という人なのですけれども、ディレクターをやっております、ずっとついて説明をしていただきました。この人の専門は動物園学なのです。ズーオロジーズのドクターの学位を持っている方でございます。

会議室などは、こういう非常に伝統的な古い暖炉、陶器でつくった暖炉等が置いてありまして、なかなか風格があります。

この動物園では、セミナーとか再生治療、動物が傷んで持ち込まれてきたときに、ここで再生する。それから、家で飼われていたものを野性に戻して森に帰す、そういうこともやっているようでございます。

それから、保存ですね。いわゆる生物、種の保存、それから繁殖、再生等についていろいろ取り組みがされていて、それがいろいろな学会等で発表されて、報告書等で周知されているというような仕組みです。その報告書をもって、いろいろな寄附者がお金を出してくれるというふうに言っておりました。

ここは、素晴らしいことに、財団等の寄附金で全体の予算の50%が賄われていまして、入場料金は全体の予算額の30%にすぎませんと言っておりました。何に対して寄附をしているかといいますと、生物多様性の保全と再生と維持、この事業に対して賛同することで寄附金が届けられているようでございます。

多様なサポーターがいるわけですが、アルケットというようなパンフレットは小

さい子どものためにつくられていて、これも子ども向けのパンフレットですね。これは、アニマルレポート、年次報告書になっています。こちらのものは、特化した動物についての説明等の冊子がつくられています。たくさんの冊子がつくられていて、特に、この動物園は、世界動物園水族館協会に属していて、そこで生物多様性のネットワークを組んでいるようでございます。いろいろ困った場合には、そういう各国のネットワークにのった研究者を呼んで研究あるいは再生等の事業を行っているということでございます。

例えば、これは、ウッドペッカー、キツツキです。アカゲラと言うのでしょうか、そういう鳥の分布図がここに示されています。ところが、問題は、このように毎年どんどん数が減っておりまして、このままいくと絶滅してしまうということで、こういうキツツキが好んで巣をつくる樹木というものをふやしてほしいという募金をしているのです。この本の一番後ろにページがありまして、そのページに名前を書いて、幾ら募金をしますということで動物園の費用が賄われております。そのように、一つの動物園の成果を見せて、これだけ希少生物の繁殖をさせましたよというレポートを出して、それに賛同した人に、こんどはこのキツツキを救っていただきたいと。問題は、樹木が減少しているところにありますので、その樹木を植えていくのにぜひ募金をいただきたいという仕組みで、一つの循環したシステムをつくっていると私は思いました。事業をサポートしているサポーターと、動物園がやっている事業とのリンクが上手にいつているなというふうに直感いたしました。

動物園の地図で見ますと動物たちの配置がわかります。アカパンダ、レッサーパンダと呼ばれるものです。ロッキーヤマヤギ、それからタール、ウラルフクロウとか、馬とか、ヒキガエルとか、マガン、コウノトリ、ハイイロオオカミ、カラフトフクロウ、キツツキ、ハイイロトナカイ、グズリ、ユキヒョウ、タジキスタン羊、それからアムールヒョウ、ハヤブサ、ワシミミズク、ヤマネコ、アムールタイガー、タテガミオオカミ等々の動物が、ここは生物種の種類数でいくと60種だそうです。

こちら側に、牧場形式になっていまして、ここが多分国道なのですけれども、国道をくぐってこの牧場につながっているというような仕組みになっています。ここでは、馬とかヤギとか羊とかブタとか牛とかウサギとかニワトリとか、そういうようなものが飼われています。そういうところでございます。

一言申し上げておきますと、ここでは暖房を特に考えていません。つまり、このあたりにすんでいるもの、寒いところに住んでいるものだけを飼っているのです。そして、繁殖させ、再生し、維持していくということなので、暖房の費用がかからないと言っていました。

これは、寄附金の占める比率は50%ということで、この下の右にありますように、ファダーというのは寄附者のことです。ボルボというのは、ちょうどイエテポリというところはボルボの本社と工場があるところで、こういう自動車会社が多く寄附金を出しているわけです。こういうふうに、そのロゴマークの入ったパネルを張って展示して、こういう人たちが自然を守っているのだということを動物園側が主張しているのです。こま

できちんとやっているというところが、私はとてもすばらしいと思いました。

それから、このあたりは、額において中級の基金者ということです。これは、私はスウェーデン語を読めないので何だかよくわからなかったのですが、スポンサーと書いてあるのは読めますけれども、そういうような展示コーナーが屋外にあって、アピールしている形になっています。

それから、動物の展示パネルですけれども、ここに何とかパンダが展示されていますが、ここにも、基金者はこの会社で、サポーターとしてこういう人たちがこれを援助していますというふうに、いろいろな表現の仕方でこれをサポートしている人をきちんと表明しています。このあたりが非常にしっかりしていると感じました。

園内至るところに、このあたりにはこういう動物がすんでいますということを解説しているのです。ユキヒョウも、ここにだらっと寝転んでおりますけれども、上の方から下を望むと、このユキヒョウが見えるという仕組みになっています。

ごらんのとおり、入園者が立っている床は木道なのです。木の手すり、檻みたいなものが見当たりません。ワイヤーの網がかかっているだけで展示システム終わりという仕組みなのです。この木道は、地面から離れておりますので、自然を壊していません。この左に立っているレナさんは、私たちはそういうところに非常に気を使っていますということを強調されていました。

ここにはトナカイがあり、この上の方は、アムールタイガーだったと思いますけれども、こういう石山みたいなところですが、ここもワイヤーネットが張ってあるだけです。

それから、ここをよく見てみますと、ここはレッサーパンダのコーナーだったと思うのですが、ここに2本、下の方に電線が通っています。それを嫌がって、こんなに低いフェンスでも外に逃げたりしませんと言っていました。このあたりに近づくのを非常に嫌がっているということでした。

このように、動物は、ほとんど自然のままのところに入れられています。至るところに木道が通ってしまっていて、この木道がぐるっと回り込んでいます。たまにこういう地面に降りてくるといいうところもありますが、ここには実は動物がいないエリアなのです。何もいないところ、次のエリアに向かうところというのは地面の上を通している。動物のいるところは、ほとんど木道で、下の方は、動物側に向ける場合と、このようにネットを張って抜けられないようにしている場合があります。

ところどころにベンチが設けられて、雪をよけるシェルターがかけられているところもあります。場合によっては、部分的にはガラスなのです。これは、ネットが張ってありますが、金網から突然ガラスの面になって、そこから見てくださいということを暗に言っているわけです。このように動物を見るところは、大体雪の多いところですから、こういう雪よけのシェルターが張ってあります。

海につながった入り江みたいなところにすぐに出くわすのですが、そういうところはなかなか風景がいいので、こういう張り出した木床があるスクエアをつくっております。

これはトナカイで、抜け落ちた角などを触らせて、結構重いということを実感させています。

それから、この下の部分は、これをくるっと上に持ち上げると、ここにスカンクなどがありますけれども、動物のにおいをつけてあって、こういうにおいがするのだというのをかがせているところがあります。

それから、走り幅跳びのジャンプコースみたいなものがあって、こういう動物だったらここまで飛べるよというを見せているのです。小さい子は、ここで実際にひょこひょこ飛んでおりました。

これは、一見、電話ボックスですけれども、この受話器をとって、ここに動物の番号が書いてあるのです。この番号を押すとその動物の声が聞こえるという仕組みです。

フクロウの集音装置としての顔面の役割とか、小さい声でしゃべっても向こうで聞こえる。これは、日本でも幾つか出くわしたことがございます。

それから、クイズ形式で、こういうぱたぱたしたものが立ってしまっていて、ここにクイズが書いてありまして、それをあけると答えが書いてある。そういうふうにして知識を展示しているわけです。

案内パネルにも、上げたり下げたりして、その心は何かというようなことを記述しています。そういうふうにして、パネルを一生懸命さわらせて見せるようにしているという工夫が見られます。

この右の方は、こういう鳥はこれくらいの穴をあけないとすみませんよという巣箱のいろいろの形状なのです。巣箱の穴の形も鳥によって違いますよということを子どもに教えております。

これは、アムールタイガーがほかのタイガーに比べてどれくらい大きいかというのを原寸で示しているという図です。非常に巨大というか、長い塀をつくりまして、そこに原寸のタイガーの写真を展示しております。

この右上の方は、オオカミと一緒にディナーを楽しむ会みたいなものがここで時々催されるらしいのですが、この日に行ったとき、入り口はここなのですが、反対側のすぐ近くでオオカミがこうやって伸びているのです。昼寝しているのです。実は、昨晚パーティーがあって、はしゃぎ過ぎて疲れ切って寝ていますという説明がありました。そんなようなこともやっているようでございます。

それから、これが牧場です。これは、牧場の模型を上から見たところですが、原寸で見ると非常にすごいもので、中身は円山動物園のこども動物園のような感じのものです。実際は子どもがいろいろ触れて遊べるようなところです。ニワトリがいたり、ウコッケイがいたりします。

それから、ここはいろいろなウサギの穴があいてしまっていて、ちょっと脅かすとすぐ穴の中に逃げ込んでしまうのですが、ウサギを抱いてその暖かさを実感できるわけです。

それから、子豚もいます。ここから入って行って、子豚の近くにいて、ここまでこそ

ごそ行って近くで見れるのです。こういうふうにはいずり回って出てくるというような見せ方をしています。これは、牧場で放牧して、いろいろな動物を飼っているというところ
です。

お土産屋さんには、こういうオリジナルグッズがあって、足跡のペンダントとか、アムールタイガーかユキヒョウかのラベルが張ってある水のボトルを売っているということ
でございます。

キャリアーに子どもが乗っていますが、こういう類のものがいっぱい置いてありまして、
荷物を乗せたり、子どもを乗せたり、場合によってはお年寄りをこれに乗せていくという
形で、どうぞ自由にお使いくださいといったようなキャリアが用意されています。私はこ
ういうものを見たのは初めてです。

これが、ノルデンスアークという動物園で、一般的には余り知られていないようなので
すけれども、生物多様性の保全、再生、維持というものを第一のテーマにして、ひっそり
と、この大自然を使って木道で人を非常に限定的に歩かせるだけ、それで周りの自然はほ
とんど手をつけずに、動物をそこに入れて、ネットで区切っているだけという動物園です。
この見せ方は見事だなと私はすっかり感心して帰ってきました。これは、そのままという
わけにはいきませんが、円山動物園でも、このような雰囲気これから自然に戻す、再生
という形で考えてもいいのではないかという感想を持って帰ってまいりました。

ここからは、私のきょうの提案、第5回目のリスタート委員会に対しての提案というこ
とになりますが、一つは里親サポーター制度でございます。

市民の動物を動物園が預かる、つまり、今までの動物園は、どこの動物園もそうだと思
うのですが、動物は動物園のもので、見に来たい人は見に来てくださいという考え方から、
すべての動物に里親をつけて、そこで基金を募るという形にする。そのかわり、お金を
出してもらえども、動物は子どもとか一般市民は飼えないわけですから、それを動物園
がかわってお預かりしましょうというふうな仕組みに逆転させて、市民にとっての動物園、
市民がつくっている動物園というふうに考えていってはどうかという考え方が一つござ
います。

例えば、分譲みたいな感じになりますが、ライオンを1匹あたりの寄付金を5,000
円で2,000人集めれば、1,000万円というふうに考えたとします。例えば、年間
七、八十万人のビジターがいるわけですから、そのうちの5万人ぐらいにサポーターのお
願いしますと、一人5,000円で2億5,000万円が入場料とは全く別個の基金になっ
ていく、そのような考え方です。

それで、サポーターへの見返りサービスとしては、里親の証明書、つまり、あなたの家
族になりましたという証明書を動物園から出す。それから、該当動物の生態の解説パンフ
レットを発行する。それから、オンラインのウォッチングができるパスワードを、これは
カメラをいろいろなところに設置しなければいけません、そのパスワード番号を与えて、
自分のお家からネットワークを通して自分の子どもにした動物を観察することができる。

それは、誕生日会とかえさやりといったサービスがある。それから、Eメールインフォメーションサービスとして、動物園のイベント案内等がダイレクトに届いてくる。そういうような仕組みの里親制度をやってはどうかという考え方でございます。

この基本的な考えとして、最初は動物に対して人間の感性を働かせて、この子がかわいいとか、この子を子どもにしたいということを感じさせる。それから、その動物についていろいろな知識を動物園からもらって学ぶ。それで、実際にはこの子の親になっていることをしてあげますというサポーターになる。動物園がその動物に関してビジターにいろいろなサービスを提供するというような仕組みをつくってはどうかということです。多様なサポーターへの刊行物や、さっきのノルデンスアークの印刷物、これは非常にきれいな写真を使っています、とてもきれいな冊子になっているのです。円山動物園でも、ただ動物を写すのではなくて、きれいな、あるいは動物らしい動物そのものの迫力みたいなものを映像化していくという技術が必要になってくると思います。

二つ目は、動物多様性ということで、地域の自然を生かす。すぐ隣は原始林でございますので、極力、原始林に戻していくような方向で、円山動物園は長い年月をかけて自然の森に戻していくという方向を持たせてはどうか。

それからもう一つは、北海道の生物、生き物というものを極力小さい子にきちんと教えて、だれに聞いても、あそこに飛んできたのはカワセミだ、あるいはヤマセミだ、ヤマセミとカワセミの違いを言えるぐらいの子どもを育てていく必要があるのではないかと。例えば、ニホンザリガニとアメリカザリガニのどこが違うということが言えるような、そういう子を育てていく必要があるのではないかと。思います。

例えば、今まで円山動物園では、オオワシとかオオムラサキの再生、繁殖というものを頑張ろうという意思表示をされていますけれども、オオワシ、オオムラサキ等の保全活動をもっとPRして、冊子等にして、今までこれだけやってきた、これを今後もっと進めていくという基金を募るといった材料にもしていけるのではないかと。思います。

基本的には、森と水辺と草地、土つきの草地ですね。この三拍子そろって一つのビオトープ、いわゆる生態系のモデルがつくられていくわけですから、円山動物園にも水という、今は谷底に円山川が人知れず流れておりますが、あの川を動物園の中に通して見せるようにしていきたい、そのように考えています。

円山動物園としては、希少種の保存、繁殖、再生というものに取り組んでいくということであらゆる面で市民に訴えかけていく、これから自然を大切にしていこうという姿勢をアピールしていく必要があるのではないかと。思います。

また、動物病院も、今、公開をしましたという新聞報道もありましたけれども、そういうところの協力も得て、セミナー、再生治療等を頑張っている様子をどんどんアピールしていくということが必要だろうと思います。

シマフクロウという希少種もそうだろうと思いますけれども、円山動物園としてこれとこれとこれについては保全と再生維持の任務を負っているということを社会的に周知させ

る必要があると思うのです。先ほどお見せしましたけれども、ノルデンスアークのように、ちゃんとしたパンフレットをつくって、かくかくしかじかの理由で私たちはこのような任務を負って生物多様性の保全に取り組んでいるのだというアピールをすべきだと思います。

それから、ここに基金をくれている人たちには、本当にこれに倣って、こういうようなプレートを用意して、それを公開していく、その企業に感謝の意をあらわしていくという動物園側の姿勢が必要だろうと思います。

それから、周辺エリアとの連携でございますが、円山原始林との連携ということで、円山公園の西側の既存林ですね。それから、スポーツエリア、神宮エリア、それから、もうちょっと離れますと、彫刻美術館や大倉山シャンツェがありますけれども、そういうところと何とかうまく連携してルートづくりをしていくということが必要ではないかと思えます。

この前、大倉山のミュージアムの館長にも会ってまいりましたが、あそこも入場者数が微減状態になっていて、ぜひ動物園と連携ができれば、バスの便などをうまくあわせて、そこが終わったらこっちへ来る、こっちが終わったらそっちへ行くというふうにして、とにかく人をふやしていくということが必要ですねという話をしてまいりました。

これは、円山動物園の入場者数、北海道神宮に来る人々の数、円山球場に来る人の数、テニスコートを使う人、それから陸上競技場の人数、それから円山居住者、宮の森居住者、彫刻美術館の入場者、それから大倉山ミュージアムの入場者の総数でございます。

これで見えますと、平成16年で273万4,500人なのです。これが、円山動物園だけを取り上げると63万人ということになりますけれども、連携したルートを考えますと、そちらから流れてくるというふうを考えられるわけです。これの1.5倍というのは、まず連携するだけで固くない入場者数を見込めるのではないかと思います。ぜひとも、この連携を推進していきたいと考えています。

それから、円山原始林の保全と再生ということで、これも1869年からまちづくりが始まっているわけですが、やはり、ここでも少しずつ生物種が減少してきていまして、帰化植物が増加しています。植物だけを見ても帰化植物が増加しているという傾向が見えているということが2005年にまとめられた報告書にございます。

そういう意味では、原始の自然を人が守っていかなければいけない。我々の子孫に対して我々が守らなければいけないということで、できるだけ自然に手をつけないで、あるいは再生に手をかすという形で円山の森を広げていきたいと考えるわけでございます。そこで自然を傷めない木道をつくるというのは一つのアイデアであるかなと思います。

ここで斜めの赤い軸で歩行者道路としてありますけれども、先日、市長と話をすることがありまして、神宮エリアとか、この辺の円山公園、こっちの円山公園緑地、スポーツエリアと動物園の間が自動車道路で分断されている、ここで人の行き来がなかなかしにくい、あるいは危険な状態を生んでいるので、ここを何とか歩行者道路にできないか、これは市役所の中で横断型の検討チームをぜひともつくっていただきたいということを口頭で陳情

いたしました。ここを歩行者道路にすることによって、こういう方向の人の流れが出てくるといことが考えられます。

そのようにして、ここを一体的なエリアとする。今は動物園の再生というふうになってはいますが、動物園の再生を実現するために周辺エリアを含んで、動物公園というイメージでこの一帯を位置づけていくことが、将来のためには必ず大きな効果が出てくるだろうというふうに私は考えております。

それぞれの領域についてはいろいろな問題がありますが、そういう問題を、次の年度にかなり詳細に一つ一つ検討していくことによって解決策が得られるだろうと思います。

展示の方法ですけれども、徹底して北海道にこだわるというのもありではないかと思えます。私は、ノルデンスアークに行きまして、熱帯動物は一切なしという動物園を初めて見たのですが、これはこれで非常に徹底した味わいというものを非常に強く感じました。そういう意味では、無理をして熱帯動物館を全部なくしてしまう必要はないわけで、少しずつ北海道の動物に的を絞っていくような展開というふうに徐々に切りかえていくというのがいいのではないかと思います。

また、ホテルについても、円山川のU字溝をなくすことによってホテルがよみがえってくるに違いないと思います。これは、歴史的にホテルがいたという記述がありまして、たくさんいたのが全部死滅してしまったらしいのです。そういうことなので、これは再生できるのではないかと思います。

それから、アニマルセラピーというものがあります。いろいろな障がい克服していくために、このアニマルセラピーというものが手法として登場してきているわけですので。

私どもの札幌市立大学の看護学部の教員が、これはいけますよという計画案を現在つくっております。少し実験をして、旭山病院、それから、この地図には出ておりませんが、札幌児童福祉総合センターの札幌はるにれ学園というところがあるのですが、そういうところが本学の実習施設になっておりますので、そういうところとも協力してもらいながら、出前という形になるかもしれないと言っていましたけれども、アニマルセラピーの実験を始めていってはどうかと考えています。

それからもう一つは、いろいろな広報のメディアとして、みんなが使いやすい、それからインタラクティブに活用できるウェブというものが絶対的に必要なので、デジタルコンテンツをあわせて、ウェブを通して全世界に情報を提供していく必要があります。

まとめますと、このようになります。

そこで、お手元にあります円山動物園再生事業のスケジュールとして、中間構想としては大体こういう事柄に触れていただければと思いますけれども、これを次に19年度へ向けて、少し実験等も含めて、実験をやった後に、そのデータに基づいた基本計画をつくっていくという形で進めてはどうかと考えています。

以上でございます。

これで質疑をしていますと時間を食ってしまうかもしれませんので、議題を続けさせていただきます。

次に、動物園サイドから、構想案の中間的な報告をいただきたいと思います。

金澤園長 それでは、私の方から説明させていただきたいと思います。

きょうは資料が3種類あるので、3種類を簡単に説明させていただきたいと思います。

資料1は、いつもの検討課題でございます。第4回まで、皆さんでやり取りしたものを追加して整理したものでございます。

それから、資料2は、ことしの春先に行いました市民アンケート調査の中で、前回は単純集計したものをお出ししました。今回は、基本的なクロス集計を行った部分を整理させていただいています。そして、さっき前段で申し上げましたように、ここに自由に書いていい記述がありまして、その部分に対する資料でございます。

アンケートの基本クロスを簡単にお話させていただきますと、1ページ目の問1の円山動物園の必要性、この傾向は下の方に書き込んでございますが、子育てを経験した年代層の支持がやはり高いのですが、子育てから離れたあたりからの評価は必要性が低い、薄れてきているという残念な結果になっております。

それから、2ページ目の問1-1の動物園は必要だと思う一番の理由は何ですかという問いかけについては、四、五十代の方にとっては子どものためという形ですが、二、三十代には家族と一緒に楽しめる場所というふうに見られています。そして、環境教育に反応しているところは、やはり50代以降の方が多ということで、団塊の世代ぐらいから環境という面に興味というかが向いてくるのかなと思います。

それから、3ページ目の問1-2で、動物園が必要ないと思う一番の理由ということで、基本的には全体の約6%が必要ないという回答ですから、量としては少ないのですが、その中で書いてあるのは、子育て世代まではおもしろくない、かわいそうという回答が多く、50代以降になると、税金の使い方というちょっと厳しい指摘があります。

それから、4ページ目の問2のところですが、動物園の魅力を高める必要性というところでは、いろいろな項目が書かれております。これも、この委員会の中でよく議論されている項目がそのまま載っているかなという感じでとらえております。

それから、飛びまして、上に問3-3と書いてある駐車場の問題です。ここは、やはり駐車場料金が低いという問題で、女性には負担感が高いということでございます。そんなところがいろいろ書かれております。

それで、おもしろい傾向としては、先ほどの好きに書いていいですよという方ですが、実は、旭山動物園になろうという趣旨のことが結構盛り込まれています。それは、見る側としては、それが楽しいという視点に入るのだらうと思いますが、旭山動物園を結構意識した書き方になっているかなと思います。これは、後ほど読んでいただいて、また次回にいろいろ議論させていただければありがたいと思います。

次に、資料3の中間報告のまとめについてでございます。

これは、事前にお送りしていますから、皆さん一回はお読みになっているかと思うので、私の方からは簡単に概要だけをお話しさせていただきたいと思います。

私の説明は、事前にお送りしましたA3のペーパー、これは言葉の整理がされていないところを整理していますが、ほとんど形は同じなので、これで説明させていただきたいと思います。

基本的には、今回の中間報告の案は、正直言って事務局としても消化不良のところがありまして、一番最後の方にあるのですが、いろいろなイメージ図がまだ入っていません。これが入っていかないと、まさに皆さんと議論できないところだと思うのですが、事務局としてまとめるときに、一たん中間報告としてまとめて方向性を定めないと、果たしてそれがいいかどうかということもあるものですから、先に中間報告をまとめさせていただきました。この内容についてお話をさせていただきたいと思います。

動物園が抱える課題というのは、こういう行政監査がありました、役割の変化もあった、意識改革もしなければならない、遊園地、食堂、売店の問題がありますというようなことが当初から出ておりました。それがあるからこそ、今回、リスタート委員会をつくらなければならないわけですけれども、そういうことを資料の2ページから3ページ目に簡単に書いております。

それから、4ページの方は、動物園の役割でございます。これも今まで議論されてきましたけれども、レクリエーション機能、環境教育、種の保存、調査研究ということで、今まで動物園は(1)のレクリエーションの機能だけが強化というか評価されていましてけれども、今後は(2)(3)(4)にもシフトしていかなければならないという趣旨でございます。

ここでのキーワードとしては、先ほど委員長の方からもお話がありました生物多様性の確保というのが一つのキーワードだろうと思います。そういった意味で、これから役割が変わっていくということです。

それから、札幌市の施策の中でも、環境文化都市さっぽろという言葉と、世界に誇れる環境都市ということで、平成23年度までである第4次長期総合計画、それから環境基本条例の中にそういう言葉が使われています。ということは、21世紀は環境の時代であると言われていたということが札幌市の施策の中でも取り上げられておりますので、動物園もこういった施策を受けていかざるを得ないということでございます。

それから、今回まとめたのですが、言葉としてはまだ熟成されていません。これから皆さんのご議論をいただいて整理していかなければならないと思いますが、基本理念としましては、「人と動物と環境をつなぐ絆をつくる動物園」。ちょっと長ったらしいのですが、要は人、動物、環境を結びつけるということが今回の基本理念だろうという整理でございます。これは、今まで皆さんのご議論いただいている中から整理しました。

そして、先ほどは動物園の役割でしたが、今度は円山動物園としての役割をどうとらえていくか。課題もあり、条例もありというところから整理すると、円山動物園を札幌市の

環境教育の拠点にしましょう。それから、生物多様性を確保するための拠点基地にしましょう。それから、今まで余りなかったのですが、メッセージを伝える情報発信をしていないのではないかという指摘があるので、今後は拠点、基地、メディアというのはちょっと並びが悪いのですが、そういったメッセージを伝える機能を持つということ、今回の動物園の役割の一つかなと思っています。それで、こういうふうに円山動物園の位置づけをしております。

それで、実際にどういう行動をしていったらいいか。通常だと、施設をつくる場合、何とか計画といってポンとつくるのですが、そのときに、どうしても行動で示していかざるを得ないというのが今回の趣旨で、ソフト面を注目しているので行動という言葉にしたのですが、「わたしたちの動物園」という視点での行動が一つ必要だと思います。それから、生物多様性の確保に向けた行動、そして円山エリアとしての行動です。これは、先ほど委員長が説明した言葉とダブっているのですが、例えば、円山エリアとしては、先ほど委員長が出していただいた例と同じような視点だと思います。そういった意味で、私どもはこれから三つの行動を柱とします、私の動物園、生物多様性、円山という視点で行動するというのを構想案の中に入れました。

それで、議論の中でも当初からありましたように、動物園を改革していく場合に、施設だけではなくて、まずはソフトから入ろう、どういうことをやることによって私の動物園という意識になっていただけるかということからいろいろ書きました。

まず、事業展開の方向性というソフトの部分ですが、お客様を引きつける好循環サイクルということで、今回は簡単に矢印を四つ並べていますが、そういった好循環をどう出せるか。それから、メッセージを伝えるということでの好循環をどう出せるか。そして、円山動物園というブランドの構築に効果的な事業展開をこれからもしていかなければならない。そうしなければ、円山動物園そのものは生き残っていけないという視点です。

それで、今回、これを集中取組期間という中に入れていますが、新たな魅力発見ということで、今まで気がつかなかった時間帯ですね。ことし、いろいろ実験をやっていますが、夜間を強化しています。それから、季節です。夏場はやっていましたが、円山動物園は今まで冬というのがちょっと手薄だったので、これを強化しようということで冬を入れていきます。それから、企業とかNPO等の提案型のイベントの工夫と。

それから、新たな集客ターゲットとしては、いろいろ議論があったところですが、シニア層、口ハス、それからデートスポットにならないかという意味でカップル、こういう大人の場に使えないかという視点です。

それから、これも新たな考え方ですが、プロモーションです。これは、集客という視点も入れていますが、今回、みんなのドキドキ体験というものをしっかりプロモーションしました。その中で、今、28のドキドキ体験を入れておりますが、これは全国的にも多くなっております。

それから、ブログと書きました。先ほど委員長の方からも話がありましたように、これ

からはネットをいかに、ITをいかに使うかということになりますので、ブログというのは一つの方法であろうと思います。それから、携帯サイトです。今、既に動いているのですが、携帯サイトの中で、どういうドキドキ体験ができるかということがリアルタイムに見れるということです。それから、DVDというのは、まさにプロモーションDVDをつくらうということです。そうすることによって、観光客や、ここは学校の修学旅行等にも使っていただいているので、DVDで集客向上に持っていけないかということです。

それから、新たな関係性の構築というところでは、市民が支える動物園ということで、先ほどもありました「わたしの動物園」です。今、既にありますが、ボランティアの活動をもう少し広げて大きくしていこうと。

それから、ブランドの構築ということでは、本物と書いてありますが、ただ見せるだけではなく、さっきありました四つの機能があるしっかりした動物園、それに調査研究ということです。それから、大学とか研究機関との連携というのは、これからもっと求められると思っています。それから、野生動物の復元プロジェクトです。先ほど出ていましたが、オオワシとかオオムラサキの復元プロジェクトを円山動物園としてやっていきますというソフトの展開です。

こういったところが、内容を今回の中間報告に盛り込んでおります。

今申し上げてきましたが、既にことし、実験的にいろいろなイベントを行ってきました。例えば、映画と連携しましたし、象の花子の還暦祝いをしました。これは、ボランティアや友の会など市民を巻き込んで、さらに企業も入って実行委員会をつくってやってきました。そういうふうなところがずっと続いています。それから、企業が単独で持ってきたものとしては、「ZOO LOHAS ナイト」です。先ほどもありましたが、夜などの今まで気がつかない時間帯、営業していない時間帯をどう開拓するかという意味で、企業持ち込みのようなイベントをやっております。

それで、この一番下は、今まさに入り口のところにありましたが、秋の芸術祭です。これも、市民の実行委員会で成り立っています。これは、実はことし初めてやったことなので、これからいろいろやっていくことによって、もう少し変化していくと思います。

それから、今後予定している中では、もう一つ、映画との企画があります。それと、プロモーションDVDの政策を行っていきます。

これは一つの例ですが、歯科医師会は、11月8日がいい歯の日なのです。そして、6月8日が虫歯の日なのです。それで、虫歯よりいい歯の方がいいかということで、11月8日は平日なので、3日の日にいい歯の日の記念日を、歯科医師会と企業が組んでやります。

これは、市の関係ですが、ノルディックです。

それから、野生動物のパネル展を冬のバージョンでやっていきます。

それから、冬季イベントもこれからしっかり組みます。もう原案は大体出ていまして、まだ発表にならないのですが、あと何日かたてば出せると思います。

それで、さっき言いました「ZOO LOHAS ナイト」というのは、食事あり、音楽あり、さらにワインがあってということで、今まで動物園でワインなんて出ていないのですが、そういったことをやって、夜の動物園をちょっと楽しもうということです。金額的には6,000円とちょっと高目ですけども、今後、11月から第2弾に入りまして、今度は4,500円で内容を少し変えてやっていこうと考えております。こういった企業との連携例を挙げます。

それから、これは夜の動物園なのですが、夏休み中に、子どもを対象とした宿泊型のナイトキャンプということで、さる山のレストハウスで、子どもたちが20人ぐらい入って、一晩泊りがけでキャンプをやってみました。その中で、しっかり動物の勉強もしながら、食物連鎖についても、「君たちもフライドチキン食べるよね」と猛禽類の捕食の説明をしていますけれども、そんなことをしながら、子どもたちに対して動物園をどう思えるかということを企画型でやっています。

それから、ハード系としては、まず円山エリアの一体的な空間創出ということで、先ほど委員長の方から出てきたような話をこれから進めていきます。

それから、ここは動物あつての動物園ですから、園内の展示方法も考えなければなりません。先ほども言いましたけれども、旭山を求められている市民が多いので、旭山をまねるわけでもないですけども、そういった視点もありかなと思っています。

それから、来園者の利便性の向上です。委員会の中でも議論がありましたように、売店や食堂のサービスが悪いとか、キッドランドの件もありますけれども、そういったところをしっかりとやって利用者の利便性の向上を図っていきたいということです。

今、いろいろお話しさせていただいた内容は、段階的に展示方法をきちんと変えていきたいと思いますということ。いきなり白紙にして作り直すというわけにいかないの、今あるものをどう活用していくかという考え方なのですが、まず動物が快適に過ごしやすい環境をつくりましょう。これは、当然、動物園ですから動物がまず第一です。次に、お客さんがゆっくりくつろいで見られるという環境です。それから、通り過ぎるだけではなくて、やはり体験することによって感動を共有できる場所という考え方です。その中で初めて環境教育の目的である命の大切さということを学べる。そういった経験の蓄積をすることによって、新しい円山動物園が生まれていくのかなというイメージです。

今回の中間報告では、そういう形でまとめさせていただきました。

それから、同じハードの中でも、今後、手をつけていくのは何かというと、まず北海道ゾーンとの関係、野生動物育成プロジェクトの中でビオトープの設置。

それから、もともと話がありましたゾーニングの問題があります。

それから、動物だけでなく、人間側が快適に過ごせるということで、本当はこういう言葉はないと思いますが、人間のための環境エンリッチメント。

それから、動物園の顔がないということが議論の中にありました。何となく入ってきて、何となく出て行く動物園ではなくて、来た瞬間に動物園らしいということです。

また、こういった大きい施設だと、水や熱量、いわば光熱水費として約1億5,000万円ぐらい使っていますので、エネルギーの面でのリサイクル、動物の環境もあるけれども、そういったエネルギーでのリサイクルをやることによって環境ということ語れるでしょうかということです。

それから、園路とか売店といった動物園以外のスペースを考えなければならない。あとは、キッドランドの縮小ということもあるのかなと思います。

それから、先ほどもありましたが、利便施設の整理です。これは、トイレも含めてです。

それから、先ほども委員長の方からあった円山公園からのアクセスとか誘導サイン、そういったことがこれからは必要という視点で整理しております。

今、ソフト、ハードとやってきましたが、生き延びていくためには、当然、マネジメント、経営ということが必要になります。

次の集中取り組み期間の中で、まず単年度で経営黒字を目指しましょう。そのためには、入園者100万人を目指しましょう。そして、収入は倍ぐらいにふやしましょう。そして、これも委員会の中であったのですが、ランニングコストも30%ぐらいコストカットしなければならない。もう一つは、園の経営体制とか、今後経営をしていく場合に外部の視点でしっかりチェックしていく体制をつくっていく。

その他としては、もともと議論の中にありますけれども、特別会計とか指定管理者とか委託ということも考えなければならないということで、ちょっと先の話になるかもしれませんが、こういう視点も入れております。

これを全体の取り組み期間として整理しましたが、先行取組期間というのは19年度、来年度をイメージしています。そして、次の整備計画ということで、集中取組期間、平成23年までにここまでやっていこう、およそ5年ありますけれども、そのぐらいで第1期を第1期が一番ウエートが高いのですが、そういった集中取組期間としての取り組みをやっていきたいという考え方です。

これが、中間構想の整理でございます。

こういった考え方のもとに、私どもの園側の動きとしましては、来年度予算としては、まず施設を整備できるところはやりたいと考えています。それから、集客ができるイベントをしっかり考えるということです。それから、動物にかかわる問題で、新しい動物というか、この園の看板になるような動物を導入できるかどうかの検討をしながら、予算要求をしていこうという趣旨で整理をしているところです。いずれ、予算要求の内容については、12月あたりの委員会で皆さんにお話しできると思いますけれども、今、そういった予定で進めようと思っています。それを中間報告としてまとめることによって、そこに入っている中でしっかり予算要求で実現できるところ、先行的に実現できそうなところは先に手をかけていこうと考えています。そして、どうしても基本計画などをきちっとつけないとならない部分については、1次整備計画で対応するという考え方のもとに実は中間報告をまとめさせていただいております。

私の方からは以上です。

原田委員長 ありがとうございます。

ただいま構想計画の中間報告の説明がございました。これにつきまして、あるいはまた、私の方からご提案した内容も含めてご質問、ご意見等がございましたら、ご自由におっしゃっていただきたいと思います。

構想計画の中間報告の構造がかなり見えてきたかと思えます。

服部委員 まず伺いますが、話の進め方としては、今のコンセプトに基づいてやっていくのか、全体の意見を述べていくのか、フリーでいってしまうのか、どのような進め方になりますか。

原田委員長 一つ一つ決めていくというのもいいのですが、時間的にどうかと思っております。例えば、基本理念について、細かいことについてはちょっと置いておいて、ほぼこういう方向でよろしいかというふうに、順次、進めてまいりましょうか。その方がよろしければ、そのようにいたします。

服部委員 それでは、今、園長の方からスライドで基本構想案をお話しいただきましたが、この文章をずっと読んでいくと、さまざまな問題点があるなと感じましたので、その辺をピックアップして、私の方から問題提起させていただきたいと思っています。

まず第1点ですけれども、一番問題だったのは、1ページの「はじめに」です。今回、リスタート委員会ができたのは行政監査がきっかけであったことは間違いのないわけです。言葉のあやなんでしょうけれども、真ん中の最後のところに「市民の信頼を大きく損なう極めて問題のある事件が発生しました」とい書いてあります。やはり、ここは大きな問題だったのです。ただ単純に問題ではなくて、これはリスタートしていくためのきっかけとなった極めて遺憾な事件です。行政語でいえば極めて遺憾であるということになるのでしょうか。日本語に直訳しますと、恥じるべき残念なことであったということですから、その問題をばかさないで、ここを明確にしておく必要があると思います。行政監査という枠組みに入ったわけですから、そしてリスタート委員会がスタートしたということで、ここを押さえておくことは非常に大事なことだと思います。

もう一つは、2ページ目に入りますと、変革の契機となった行政監査という枠組みの中で、るる、この辺の物事が書かれておりますけれども、ここまで重複して考える必要性もないのかなと思います。「はじめに」できちんと訴えておけば、課題として挙げるべきではなくて、重複する必要は何もないので、削除していてもいいのではないかと思います。これは、一つのとらえ方、書き方、あるいは導入部分の描き方ということで、ひとつ問題を提起させていただきたいと思っています。

私だけ話してしまうわけにいかないでしょうけれども、自分なりに感じたことを、かいつまんで申し上げます。

3ページ目なのですけれども、真ん中のところに、「現行の直営方式においても特別会計制度の導入や」云々ということで、「鋭意検討する必要がある」と書いています。特別

会計を導入するというのは、リスタート委員会の中でも何度か出てきた問題ですので、特別会計を導入するという方向性はきちんと描いておくべきだと思います。さらには、指定管理者制度の民間移譲も選択肢として視野に入れながらということです。また、ここまで深く突っ込む必要性もないのかなと思います。むしろ、それよりも、円山動物園の経営健全化ということをしっかり描いておくということの方が大事だと思います。今やらなければならないことは、やはり経営の健全化、そして経営の再生ということではなからうかと思っています。動物園自体の再生であることは間違いないのですが、税金を投入しているわけですから、経営の再生をしていかなければなりません。そういったことを、もう少しきちんと描いておくと、単純に方法論ではなくて指定管理者制度に移行するのだとか、あるいは民間移譲するのだということではなくて、健全化を図って経営を再生するのだということ、やはりこの委員会としてはここにきちんと訴えておくべきことではなからうかというふうにして、焦点をぼかさないとすることは大変大事なことだと思っています。

それから、(3)番目のキッドランドですが、園長の方からも説明があったように、前の段階としてもいろいろな意見が出ていましたけれども、動物園のテーマとしてはそぐわないのではないかというのが大勢の意見だったと記憶しています。もう一つは、やはり動物園と遊園地というのは非常に違和感があります。その理念から言ってもそぐわないので、やはり円山動物園を再生するに当たって、そぐわないということを明確に列記しておいた方がいいのではないかと。また、乱暴なやり方かなと思うので、これは皆さんからご意見をいただきたいと思います。

それから、5番目の食堂、売店のことは、私の方からも随分提起しました。はっきり言って、私も毎回食事をさせていただいておりますけれども、魅力がありません。ラーメンの汁の中にめんが沈んでいる、めんが見えない、具が見えないというラーメンをきょうも食べてきましたが、高いし、まずい。「何がおいしいんですか」と聞いたら、「ラーメンぐらいでしょうね」という答えが返ってくるようでは、ちょっとがっかりします。これでは、果たして存在している価値があるのだろうかと思います。意識が全然変わっていないということを申し上げましたけれども、その辺で、この辺のことをもっと強烈に訴えていくべきだろうと思います。それにかわって、レストランとかカフェとか、新しいスタイルのものを導入するということですね。しかも、早期の導入を必要とします。もう待たないではないかと思いますが、改善すべきことをきちんと記載しておいて、新規出店のレストランやコンビニについてはどんなスタイルがいいのかということはいろいろな議論がありましたので、そういった観点から外からも、入りやすいように、あるいは入園者が利用しやすいように、もっとカップルが過ごしやすいように、そういったことをきちんと明記しておくべきだろうと思います。それは、単純なる導入だけではなくて、早期の導入を検討する必要があるだろうというふうに細かく訴えるべきだろうと思います。

また、トイレの問題も待たないだろうと思っています。トイレとか、動物にさわわるわけですから、手洗い場所をもっと多数設置するとか、今すぐやれることはやるべきだろう

と思います。あるいは、若いお母さん方をターゲットとするならば、授乳施設が余りにも少な過ぎます。たしか1カ所くらいだったと思います。そういった意味で、清潔で気持ちのよい過ごし方をしていくためには、こういったアメニティの部分強化する必要があります。この点が全然触れられていなかったと思うので、この辺をきちんと明記しておく必要性があるのではないかと思います。

それから、先ほど委員長の方からあったように、円山動物園、公園として、共生型都市を目指す必要があるということを書いています。円山動物公園ということで、このエリアの枠組みをきちんと訴えるということはどこかで押さえておく必要があると思います。

最後に、キッドランドの問題については、そぐわないというよりも、違和感があるというよりも、先ほど園長の方から縮小という言葉が出ていましたが、廃止という言葉を入れ込んでおくということも、この委員会として考えていくべきなのかなと思います。余りにも違和感があってそぐわないというのであれば、むしろ廃止していくという考え方を示しておくべきかなと思います。

こんなことを感じましたので、私なりにかいつまんでご提案させていただきました。

原田委員長 ありがとうございます。

非常に的確なご指摘をいただきました。

ただいまの指摘につきまして、動物園サイドでそれぞれお考えになっていることはございますか。

金澤園長 考えていると言われても、すごいなと思って聞いておりました。それこそ、私たちが書き足りなかった部分なのかなと思いました。どうしても、私どもの方で整理してくると、やれそうなところ、やれないところの見きわめしながら書いていくので、ちょっと弱いところがあります。そういう意味では、まさに服部委員指摘されたとおりでと思います。

委員会として、その方向でいいよということであれば、例えばキッドランドの縮小または廃止という表現でやるということは不可能ではないと思っております。ですから、今言われたようなことで、ちょっと文言整理をさせていただこうかなと思っております。

原田委員長 この委員会ですべてそれぞれ文言を変更、訂正あるいは修正するといったことを決めていくには時間が足りませんので、今のご指摘の点を踏まえまして、改めて案をお作りいただきたいと思います。

加えて、ほかにこの点について何かございませんか。

大谷委員 新しい視点ではないのですが、服部委員がおっしゃったことでもうちょっと言っておきたいと思うのは、2ページの最後から2行目の「公立動物園としての社会的役割を明確にする必要がある」とありますけれども、先ほどおっしゃった「民間移譲の選択肢として」という文言を入れてしまうと、そごが生じるのではないかと思います。例えば、部分的にはアウトソーシングを考えるとというふうに入れるか、服部委員がおっしゃったように、そこは伏せて経営の健全化を図るというふうにまとめてしまった方がいいので

はないかと思いました。

原田委員長 ちょっと聞き取れなかったのですが、どの部分でしょうか。

大谷委員 2ページの動物園の役割の明確化の最後から2行目です。

金澤園長 2ページの下から2行目以降で、「単なるレジャー施設ではない公立動物園としての社会的役割を明確にする必要がある」といっていますが、その一方で、3ページの(3)の意識改革の中で、先ほど服部委員が言われた下から3行目の「現行の直営方式においても特別会計制度の導入や」云々「あるいは民間移譲」というところが合っていないのではないかということです。逆に言うと、公的動物園としての社会性を出すのであれば、指定管理者とか民間ということはすばっとネグってしまって、先ほど言われたように、健全化を図るということをしつこく出せばつじつまが合うのではないかというご意見です。

原田委員長 まさにそのとおりではないかと思えます。

大谷委員 それともう一つは、今の抱える課題の部分の(1)番、(2)番、(3)番までと(4)番、(5)番、服部委員もご指摘されたキッドランド以下のところですが、そこは具体性のレベルがちょっと違うのではないかと思えます。ですから、施設についての課題というふうにまとめてしまうか何かされてはどうかと思いました。

金澤園長 (4)と(5)をまとめてしまうということですね。

大谷委員 そうです。

金澤園長 それは不可能ではないです。私は、整理するときに、どうしても経営主体が違うものだから、ちょっとくくりを分けたのです。

服部委員 私は、このとおり遊園地の問題は独立させて、動物園と遊園地のあり方を議論していく中で、一体化しているということが非常に問題があるのです。ですから、委員長からもいろいろなご提案がありましたけれども、そのような方向で考えていくとなると、遊園地というのはどうしてもなじまないのです。その意味では、こういう形でもいいでしょうし、書き方でしょうから、(4)番と(5)番を一体化しても構わないのでしょうかけれども、押さえるところは押さえておいた方がいいのではないかと思えます。

笠委員 もし、これを入れるのであれば、動物園の各施設そのものの問題も含まれるわけですね。獣舎とか、その配置計画とか、そういう施設関係の中で、みずからの獣舎と委託しているキッドランドとか食堂というふうに分けて、本来はここに獣舎なりの問題も入ってこない課題としてはおかしいわけです。

金澤園長 そうですね。施設として、獣舎も抜いているし、トイレも抜いているし、確かに外れていますね。頭の中にはそれも整理しなければならないというのがあったものですから初めから抜けているのですけれども、そういう意味では、動物園直接の施設と、許可でやっているところと、分け方は違いますけれども、整理した方がいいですね。

山本委員 ここは「はじめに」の冒頭の部分ですから、どこまで具体的に細かく各論を書くのかというのはまた別の話だと思うので、その整理はやっていただければいいのではないのでしょうか。

原田委員長 課題の整理については、当初から、課題の抽出でしたか、こんなリストをずっともらっていますね。あれにもうかなり書かれていると思いますので、あれを全部ここで書くと大変なことになります。むしろ、それは資料編の方に回して、そういう施設関係についての課題などをかいつまんで書かれたらいいのではないかと思います。ここに、円山動物園の抱える課題としては(1)から(5)までだと書いてないではないかということになりますので、ちょっと網羅的にどこかに書かれていて、その詳細は後ろの方に添付されているというふうにしないと、なかなか本題に入りません。

金澤延長 わかりました。

原田委員長 それでは、服部委員から厳しいご指摘がございましたが、4ページぐらいまでは、そのようなことを含めて少し文言等を直していただきたいと思います。

ほかに、特にここはということはありませんか。

具体的には、提案編として、後の方が構想としては重きをなしてくるところだと思います。

4ページぐらいまでは、少し訂正をしていただくということによろしいでしょうか。

(「異議なし」と発言する者あり)

原田委員長 それでは、5ページ以降の札幌市における円山動物園の役割についてはいかがでございましょうか。

第4次札幌市長期総合計画とか、札幌市の環境教育の拠点とか、札幌市環境基本条例というものを制定してというように、札幌市が市として目指している方向の紹介があって、そこに円山動物園の役割というものを見出そうとしている、それが5ページから6ページに書かれている内容でございます。

それで、6ページの(2)のところ共生型都市とありまして、ここで北海道の生物多様性確保の基地というテーマが出てくるわけでございます。それで、7ページで、三つ目のもう一つの役割、多面的なメッセージを伝えるメディアというテーマが出てきます。

服部委員 ここら辺は、もう議論されたことがきちんと網羅されているので、よろしいのではないのでしょうか。

原田委員長 よろしいですね。

円山動物園の役割として、この3点がきちんと表明されているので、よろしいのではないかというご意見でございます。

ここはよろしいでしょうか。

(「異議なし」と発言する者あり)

原田委員長 次に、三つの柱ということで、基本理念というところへ入っていきます。

まず最初に、ここの頭書に書いてあるのは、「人と動物と環境をつなぐ絆をつくる動物園」です。これは、まだ確定はしていませんということでございます。

金澤園長 ここは、ある種、キャッチコピーなので、インパクトのある言葉にしたかったのですが、整理して文書をつなぐとこういう言葉になりましたので、皆さんがじっくり

くる言葉にしていなければと思います。

原委員 ちょっと長過ぎる気がします。

原田委員長 コピーが得意の人がここにいらっしゃるのではないですか。

山本委員 何か後でお出ししましょう。

服部委員 でも、考え方、理念としてはこういうことでしょうね。

山本委員 こういう言葉で間違っていないです。議論してきたことを言えばこうなります。それを、もう少し違う言葉でつなげた方がいいと思います。そうではないと、メディアになりません。

服部委員 ださいものね。

山本委員 ださくはないですよ。

服部委員 ヒューマンとアニマルとエンバイロメント、この三つがきちんと連携していくのだよ、それが円山動物園ですよということを理念としてきちんと訴えていくということが大変大事だと思います。そういう意味では、基本理念という言葉は別としても、人と動物と環境がチェーンになっているのかな、これがとても大事だということによろしいのではないのでしょうか。

山本委員 こういう真っすぐな言葉がこういう資料に普通に入ってくるというのはとても大事なのですが、それを世に向けて言うときに、別のコミュニケーションキャッチがあるわけです。ここでは、くどく、わかりやすく、むしろこういう言葉があった方がいいのかもしれない。

笠委員 でも、「つなぐ」というのは要らないのではないですか。「環境の絆をつくる動物園」の方がすんなりいくような気がします。わざわざ「つなぐ」を入れる必要がないような気もします。

山本委員 「環境の絆をつくる」ですか。

服部委員 「環境の絆をつくる動物園」か。

山本委員 あるいは、「絆」をとってしまって、「をつなぐ動物園」にしてもいいかもしれませんね。

笠委員 この二つがあるのはどうもなじみが悪いです。

原田委員長 「絆をつくる」をとってしまいませんか。

山本委員 「つなぐ動物園」でいいような気がします。

服部委員 でも、きずなというのは大事です。人間のきずなというのは、基本的には愛でしょう。愛です。

山本委員 これは、意味は同じでも、好き嫌いがありますね。

服部委員 いろいろなところに愛という言葉が出てきていたと思います。そういう意味で、きずなというのは愛そのものですので、やはりこだわります。

小林委員 どのような言葉になっても構わないと思うのですが、外れてしまったらごめんなさいという感じなのですけれども、真ん中のところに(1)循環型都市と(2)共生

型都市とありますけれども、この共生という言葉がこの時代にすごく出てきています。先ほどのノーマライゼーションも日本語に訳すとそのような感じの言葉でなかったかなと思うのです。

実は、道中理という理科の研究団体があるのですが、そのテーマが自然との共生と何とかと、私もきちんと覚えていなくて申しわけないのですが、共生という言葉を使っているのです。環境教育の拠点であり、いろいろな人と動物と一緒に生活していくというか、それを通して次のことをやろうしているわけです。そういう意味では、そのあたりのところにも言葉が隠れているのかなと思いました。

山本委員 私たちが考えるときに、多分、子どもにもわかるような言葉をコミュニケーションキャッチとして前面に出すかもしれないなと思っています。共生とかきずなとか、どんどん大人っぽくなってしまっています。理念としてはそうなのですが、伝えていくときはもう少し簡単な言葉にした方がいいのかなと、業界的に思います。

高木委員 共生という言葉がわかりにくいのです。僕も、環境教育の中で、つながるというのを簡単に言うていくのですが、とてもわかりにくいのです。相手のことを共感する、わかり合うということだと思うのです。

山本委員 二、三年前に、携帯体電話の会社が、こういうビジュアルを使って、つながる、つなぐというふうにしたことがありました。だから、つなぐと言ってしまうと、つなぎたい企業とか組織がいっぱいあるので、割とわからなくなるケースがあります。ですから、ここで余りこのことを言うていても限度があると思います。

服部委員 この考え方は大事です。理念としてはオーケーと。

原田委員長 結局、キャッチフレーズにちょっと難しい言葉が入ってくるとわからなくなってしまうのです。解説編で入ってくるのは、解説がきちんとできるからいいのですが、キャッチフレーズに入ってしまうと、解説をよく読まないとわからないみたいになってしまって、解説をよく読む人は余りいないので、結局わからないということですね。

山本委員 はい。

服部委員 ただ、やはり理念としては押さえておかなければならないわけです。理念を市民にアピールするときは、それに合ったキャッチコピーが出てくるということだろうと思うのです。そういう意味では、この理念というのはこの言葉どおりで、「つなぐ」がいいのか、「絆」がいいのかということなのでしょうけれども、これはきちんと押さえておかなければ、理念なくして改革はありません。

原委員 この「つなぐ」と「絆」が意味的にダブっているのです、それがうるさくというか、ちょっと長く感じる要素だと思います。

原田委員長 動詞が二つ入っているからですね。

服部委員 そうですね。「つなぐ」を抜きますか。

笠委員 それはお任せします。

原田委員長 それでは、その辺の細かいことについては後ほどということにしまして、

大まかにはこういう基本理念でよろしいということでございます。

三つの柱、一つ目が「わたしの動物園」という視点での行動、二つ目が生物多様性の確保に向けた行動、三つ目が円山エリアとしての行動、これについてはいかがでしょうか。

服部委員 「わたしの動物園」という視点から私なりの意見を申し上げますと、いろいろな考え方があるのですけれども、その中の一つで、収入を上げていくためには、有料入園者をふやしていかなければいけません。でも、それもおのずと限界があるわけです。そういう意味では、無限大に広げるためにも、先ほどおっしゃったサポーター制度というものはこの中に明確に入れ込んでいく必要性がありますし、その一つとして企業協賛というものが存在しますということだろうと思いますが、そういった観点がちょっと薄いような感じがします。ですから、サポーター制度をもっと明確にここに入れ込んでおくと。そして、それが最終的に収入源につながっていくのですということではなからうかと思えます。

山本委員 そのときに、ちょっと補足させていただくと、最近、私どもは幾つかの事業の中で、企業協賛をぜひというようなオファーがいろいろなところからあります。そのときに、そういう方は意外と簡単におっしゃるのですけれども、企業側からするとメリットはほとんど感じられないことが多いのです。

先ほど見せていただいた北欧のああいうタグですね。欧米でよくやるシステムですが、ボロボロが小さかったのはちょっと意外でしたけれども、あれはA、B、Cでカテゴリーに分かれていて、協賛金額によってサイズが違うのだと思いますが、本当に協賛メリットがある提供の仕方をしないと、長続きしないのです。

だから、この中で、そのところはわかっているんだよということを盛り込んでおいた方が、後々企業も協賛がしやすいというか、そこも一緒に考えていくというスタンスがないとちょっとつらいかもしれません。そういう形の変った補助金みたいになってしまうと余りよろしくなくて、双方がハッピーになるような関係でなければいけないと思います。

原田委員長 協賛する側のメリットというもの、それは社会的なメリットですね。プライベートのメリットという感じではないけれども、パブリックなメリットということですね。

山本委員 そうですね。もちろん企業側も、例えば環境が環境会計という形になったように、こういうことに賛同すること自体をエンドユーザーがそれを評価していけば、また違うスタイルになると思うのです。私たち市民もそういうことを考えていくということまで盛り込めるとすばらしいと思いますけれども、今、ちょっと表現は思いつきません。

服部委員 そういう意味では、その部分はまだまだ教育していく必要性がありますね。企業側も、そういった意味で市民に理解してもらえない。そのために、企業としても費用対効果が出てこない。そういうことで非常に難しい面があるのですが、やはり企業側にメリットをきちっと訴えておかないと、今、山本委員がおっしゃったように、最初はおもしろ半分、あるいは義務感で協賛してくるけれども、本当の意味でのボランティア的な、いわゆるサービス精神が伴わない寄附で短く終わってしまうという危険性はあるでしょうね。

企業側が喜ぶようなやり方はたくさんあります。そこまで具体的に書く必要性はないと思いますけれども、そこを押さえておくと。

山本委員 書く必要性はないけれども、そこを理解しているということは一行書いておくと、意外と、後でインパクトあるかなと思います。

原委員 「わたしの動物園」という視点からでしたら、市民のための市民の動物園の考え方の中に、先ほど原田委員長の方からサポート制度の例を出していただきましたが、ちょうどこの場面に入ってくるかと思うのです。市民に対して、ここでは情報とか体験とかいろいろなことを与える側の情報は載っているのですが、この文章ですと、サポートするという考え方がちょっと弱いような気がするのです。市民のボランティアを浸透ということも一緒に書かれていますが、その辺を全部細かくというわけでもなくてもよろしいのですけれども、原田委員長がおっしゃっていたのと同じように、サポートによる自分の動物に対する意識の持っていき方、こういう考え方があるんだということとか、一つはお金を出すという形ではなく、逆に労働として、この動物のためのえさを切りたいとか、お掃除をするとか、そういうボランティアのあり方をもうちょっと、そこまで具体的でなくていいのですが、こういう行動で参加していくということが盛り込まれていたらよりいいのではないかという気がします。

服部委員 そうですね。先ほど私もお話ししたように、横文字でいうと、やはりボランティアの部分とドネーションという部分とサポーターという部分、そういったことをきちっと明記しておく必要があるだろうと思います。

原委員 今のお話でちょっとわからないところがあるのですが、ボランティアという考え方とサポートするという考え方は、あるところで一緒になるということはできないのですか。全く別な考え方なのですか。

服部委員 これは、連鎖であって、入り口はボランティア的な部分もあるし、サポーター的な部分も入ってくるし、ドネーションから入ってくる場合もあるでしょう。目的、到達点はみんなつながっていくことだろうと思います。目的とするものは、最終到達点は三者混合になってくるのではなからうかというふうに私は描いています。

里親制度という枠組みという中でサポート制度がスタートする、いずれにしても、そこでは金銭的なドネーションが当然伴ってくるわけですから、そこはドネーションも加わってきます。あるいは、その中にボランティア的な要素も含まれてくるわけです。入り口は三つのあるよというだけではなからうかと思います。その辺の物事は、やはり三つのスタイルはきちっと描いておいた方がよろしいのではないかと思います。

大谷委員 出せる人が出せるものを出して体制を整える、動物園の側はそれをバックアップしていくのだという姿勢を書けばいいと思います。時間がある人はボランティアとしてとか、知恵とか、経済的に余裕のある人はお金を出すとか、いろいろなサポートの仕方があって、それを園側はバックアップします、そういう協力体制をつくりたいのだということを書けばいいのではないのでしょうか。

服部委員　そういう意味では、園側はコーディネーターを務めるということだろうと思います。いわゆる仕掛け人といいますかね。

金澤園長　今の話を聞いていて、非常に書きづらいなと思いました。文章で表現するときに、どうやって表現しようかなと。

山本委員　でも、今は結構大事なところですよ。いつも言っているとおり、旭山動物園と比べる気はないのですが、旭山があれだけ支持されている理由の一つは、主体的に動物園が動いているということに共感しているところも多いと思うのです。ですから、コーディネーターと言ってしまうと、ちょっときれいごとのような気がするので、もっと自立的に、思いがあふれるような表現をとらないとちょっと弱いなという気がします。

服部委員　それはそうだと思います。私が思うに、旭山動物園は仕掛けが上手なのです。ですから、そういう言葉で片づけられるものではないので、その辺を上手につくっていただければと思います。ただ、やはりサポーターという制度は委員会としては必要だろうと、ボランティア制度もやはり必要だろうと、これは現実に入っているわけですからね。それよりも、もっとドネーションを描けるような体系づくりをしていかなければいけない。その報告をここできちんとしておくべきだということですね。

金澤園長　検討させていただきます。これは、今すぐいっても文章にはなりません。

原田委員長　動物園側が一生懸命サービス商品をつくって、こういうゲームを教えておいたから見てねという商品づくりを動物園側が一生懸命行って、ビジターがよく頑張ってくれているねと思うというのが旭山だと思うのです。ビジターはほとんど何もしていないのです。ただ、どんどん押されて見ていくみたいな感じです。けれども、素晴らしい動物を見せられているわけで、それはそれで素晴らしいことだと思うのです。

片一方、私は、この円山は、むしろ見せてあげるよではなくて、カフェテリア方式で、何が欲しいのかと。はっきり言うと、むしろビジターの方がこういろいろつくってしまえるような、例えばさっきDVDがありましたけれども、ビジターに映させればいいじゃないのというのが私の考えなのです。むしろ、彼らがやれるというサービスを、つまり、DVDそのものはからっぽなのだけれども、映したらそれを動物園では流しますよと。

笠委員　これがそうですね。これは市民が映しているのですよね。

原田委員長　まさに、そういうことです。

山本委員　ここで言いたいのは、市民が主役なんだよということですね。

原田委員長　そうです。それなのです。

そういうふうにして、さっきのボランティアだ、サポーターだ、ドネーションだというのがありましたけれども、ここではっきりしておきたいのは、私がつくる動物園というか、そういう意味合いでの動物園を実現したら、これはほかにないだろうと思うのです。それをやっていきたいのです。

服部委員　「わたしの動物園」ですから、目的は明快なのです。

原田委員長　これは、「という視点での行動」というふうに書いてありますが、「とい

う視点からの行動」でもいけるかなと思います。

笠委員 三つ目の円山エリアとしての行動というのは、どうも言葉がぴんとこないのです。何となく意味はわかるのですが、柱にするにはどうも弱いなとずっと考えていたのです。これは、円山エリアの拠点施設というふうに言い切った方がいいのではないかと思うのです。このエリアの中で、これだけの施設があり、人がいて、集客力もあって、情報発信もできる場所というのは、実は動物園しかないわけです。いわゆる円山という一つのブランドを持っている中の拠点施設という面では、やはり動物園は相当の重みがあると思うのです。これだと、何となくみんなで一緒にという雰囲気がないにしてもあらずなのですが、やはり、もっと主体的に円山のエリアを引っ張っていくというふうに言い切った方がいいのではないかと思うのです。

何となく、公園の施設とか、スポーツ施設は別の所管とか、市の内部の協議を経ないと何もできないとか、交通の問題とかと言っているけれども、動物園が中心にこの円山エリアを整理するというふうにしてしまった方がいいのではないのでしょうか。

原田委員長 円山エリアとしての行動というのがちょっとわかりにくいというお話でございました。私には、円山動物園がちゃんとした施設を持っていて、それはそれでよくて、エリアとしての行動というふうにわざわざうたわなくてもよろしいのではないかというふうに聞こえましたけれども、そういうことですか。

笠委員 むしろ、円山エリアの拠点施設としての行動というふうにはっきりうたった方がいいような気がするということですか。

原田委員長 この表記だけではちょっとわかりにくいという意味ですね。

服部委員 確かに、ぼやけているような感じはしますね。

山本委員 それだったら、それがいいかどうかは個人的にちょっと微妙だなと思うのですが、中核拠点としての行動というふうにするという意味ですか。そこまではいかないのですか。

笠委員 中核というか、円山公園のいろいろな施設の利用ということを考える場合に、円山動物園を中心に考えるというのが一番わかりやすい整理だと思うのです。その方が、ほかの施設の方も、いろいろ連携をとるとか調整をするにしても一番わかりやすいと思うのです。みんなが三すくみ、四すくみでやっていたら、これは全然先に進まないような気がするのです。

原田委員長 これは、実際問題としてはどうなのですか。今、周りとの連携とか、あるいは、あそこを歩行者道路にして車道を外そうよという意見も出ているわけですが、そういうことを検討できるような市役所の仕組みは現在あるのですか。

金澤園長 今回、円山動物園のプロジェクトをスタートさせるために、そういうプロジェクトをつくりました。

原田委員長 できているのですね。

金澤園長 できているというか、関係部局が集まって議論する場はあります。

原田委員長 場はあるのですね。

金澤園長 その中で、やれるかどうかはちょっと別にしても、議論はきちんとできます。

原田委員長 そのきっかけになっているのは、この動物園再生計画ということですね。

金澤園長 このリスタート委員会でも最初から議論があったように、ここだけで決着はつかないわけで、それはほかに影響があるわけですから、今、こういう委員会をやっていて、逐次報告をするから、あとで協議にのってよという形で準備しています。

原田委員長 動物園が中核になって、中心拠点としてエリアを検討する組織が市役所の中にもできているようです。

笠委員 その中でも、みんなが横並びでなくて、やはり中核になって考えていくぐらいのやり方でいった方が私はいいと思います。

山本委員 難易度が高いです。今の組織といたって、まずは会議体をつくったというふうに聞こえたけれども、どうなのでしょう。

原委員 今の笠委員がおっしゃったような形でいった方が、例えば動物園に来るエントランスの考え方とか、今、原生林につながってリスなどがいるいるいますが、そういうのをネット越しに頭上で見れるとか、そういう発想をつないでいくのをとてもやりやすくなると思います。その辺がここで全く出てこない、ぼやけたままになっていますので、それは魅力的かなと思います。

服部委員 でも、文言としては、あえて拠点施設として入れる必要性は何もないのかなと思います。ただ、漠然としたエリアとしての行動ということなのですけれども、しかしこの中には円山エリアという考え方が明確に出ているのです。だから、原生林の問題、神宮の風致地区の問題、向かいのもう一つの円山公園の問題もあります。それを、ここでは円山エリアと描いているわけです。そういう中で、先ほど私が申し上げましたが、動物公園という一つの位置づけがちょっと薄いのです。

原田委員長 それは、ここで書いておいていただかないとね。

服部委員 だから、ここに動物公園というものの描き方が出ていけば、それで押さえられるのだと思います。あえて拠点施設というのは要らないのではないかと思います。

原田委員長 円山動物園と円山公園というふうに併記していると、いつまでたっても、あの間にある道路は消えないと思います。けれども、動物公園にすると、あれを消さないことには動物公園になんかできないではないのですよ。そういう意味でも、ここでは動物公園というものを明記しておいていただきたいと思います。

構想ですからね。

服部委員 でも、将来に向かって大変大事な描き方だと思います。

高木委員 言葉じりをとらえるようなのですけれども、言い切っている部分と、必要があるという部分が分かれています。今の動物園の活動そのものが外へ飛び出していく必要があるというふうに必要性を訴えている部分と、目指しますという部分と、連携で実現していくと言い切っている部分があるのです。それは、当然、温度の違いは出てくるの

でしょうけれども、それで全体の文章として弱みを感じてしまうのです。それで、円山エリアは、まさしく必要性を訴えている感じなのです。

山本委員 委員会としての構想案ですから、ここで出てきたプランを言い切ってしまうと、それをお預けする格好ですね。

服部委員 でも、動物公園の必要性というのは、委員会としては明確に確認し合っていることです。

原田委員長 それは、ぜひ記述してほしいですね。

服部委員 そういう意味では、ここにどうしても入れておいてもらわなければいけない。全体を通しては、私が先ほど冒頭で話したように、ここに動物公園が入っていないものから、ぼやけてしまっているというきらいがあるのです。

原田委員長 きょうは、いろいろご意見をいただいております、どこまで言い切れるか。

高木委員 ちょっと戻っていいですか。

一つ目は、「わたしの動物園」というところで、市民ボランティアを浸透させていくというのは、物すごく大きな柱だと思うのです。これを前に出すというのは、結構覚悟が要ることだと思うのです。やはり、動物園や動物に思いを持っている人はたくさんいて、そのかわりを深めれば深めるほど、ボランティア活動は大変になってくるのです。

そのことを前提にしながら言葉を選ぶとしたら、やはり仕組みをつくり続けるみたいなことを入れてもらいたいのです。構築して終わってしまえないのです。これに対応する具体的なものは、後ろの方にある新たな関係性の構築というところだと思うのですが、一つ目指すものがあって、人の思いがどんどん入ってくると、そこで終われなくなってしまうのです。ですから、仕組みをつくり続けるみたいなことが理念となって、終わらないのです。永遠の未完成みたいなものになってしまうのです。そこに突入していくみたいな覚悟が出てくると思うのです。ボランティアも巻き込むということは、やめないという部分が私としては必要だと思うのです。かなり大変なことだと思うのですが、これを柱とするのであれば、仕組みをつくり続けるとか、そういう言葉が入っていたらわかりやすくなると思います。

金澤園長 仕組みをつくり続ける、浸透する、理解はちょっと違うかもしれませんが、役所としては、今回の計画もそうですけれども、計画をつくってやめるわけではないというのが常にあるのです。つくったら、それを運営していくよという気持ちは十分ある前提で書いてあります。だから、動物園がなくなる限りは続かせていかなければならない。ボランティアさんそのものが、私はやめたとなったらどうにもならないですが、ボランティアがそれなりの数になって、まさに先ほど議論があったように、サポーター制にしても、労働としてのボランティアというふうに 今やっているのは、解説ボランティアということで、要は説明だけのボランティアですから、それはまだたくさんあるよというのはまさにわかっている話です。これからは、ボランティアのメニューとして中身をどんどんふやしていかなければならないということは、もう十分承知の上でこれからやっていこうと

いう趣旨で、今はそのつもりで書いています。

さっきの必要があるという言葉もそうですが、どうしても作文していくときに、こっこの気持ちがそのまま素直にあらわれているのです。

高木委員 ここは言い切っているからね。

金澤園長 できるものしかできると書いていないのです。できるものはできると書けるのだけれども、ちょっと温度が変わってくるのです。

そういうことで、これはどちらのことでも結構だと思っています。どちらにしても、うちが動かしていくことは事実です。今、実際に130人のボランティアを抱えています。さっき言った説明だけのボランティアにするのか、飼育のお手伝いをするのか、そういうメニューを考えていく中で、また新たなボランティアをふやして、一つのボランティアの組織にするのか、たくさんのボランティア組織をつくるかだけの違いです。

原田委員長 そこで、ボランティア組織が一種の自意識を持ち始めると、市民による動物園、市民によって運営される動物園みたいな色彩がどんどん強くなっていくわけです。そこで、一つの方向を動物園サイドが持っている、ボランティアの方向と少しぶれてくるということが、いろいろな国の環境条例みたいなものが、最初はいいのだけれども、だんだんいろいろな矛盾が出てきて、どうして農耕地にできないのか、なぜ宅地にできないのか、人がふえているのになぜ自然だけ守らなければいけないのかみたいなことがどうしても出てくるのです。ですから、そういう主張で全く崩れてしまうわけではないのですけれども、改正されていく、新しい条項がまた加わっていく、それによって再生の方向も別の方向がとられるということで、結構ダイナミックに動いているようなのです。今おっしゃられているのは、まさにそのあたりのことで、かわりを持っていくと、固定した状態では済まなくて、どっちもどっちで折り合っていかなければならないという関係をどうやって維持するかということが難しいのですというふうに私には聞こえているのです。

それでも、やっていかなければならないということがあると思いますが、確かに、その辺の表現の問題も、仕組みをつくり続けるというふうに変っていきますよということを前提条件にして、そういうものをくっつけてここでうたっていくというような表記の仕方もあるかと思いますが、その辺も、最終的にこれでいこうと少し煮詰めた後で、もう一度ご検討いただきたいと思います。

それでは、どうでしょうか。円山エリアとしての行動のところもまだズバッと決まっているわけではありませんが、動物公園ということを含めていただきたいと思いますというご意見が出てまいりました。

岡田委員 生物多様性の確保に向けた行動のところ、野生動物の繁殖プロジェクトの中で、具体的な動物名としてオオワシとシマフクロウとオオムラサキが挙げられていたけれども、それは全部北海道の希少動物というくくりで、確かに北海道の動物園ではあるのだけれども、「わたしの動物園」というものを掲げるからには、やはり円山の象徴的な動物の野生復帰というか、そういうことも一つの例として、これもやっていきますとい

うことを考えていただきたいと思うのです。

旭山動物園の例で恐縮なのですが、旭山でエゾリスが少なくなっているのです、エゾリスを動物園内で繁殖させて、繁殖させた個体を旭山に放して行って、野生のエゾリスが動物園の中に遊びに来たりするということがありますので、そういったことが円山でも行われると非常にうれしいなと思います。

金澤園長 言われているのは、絶滅危急種にこだわることなく、北海道の動物ならという趣旨ですね。

岡田委員 北海道の動物ということではなくて、円山らしい動物、円山の象徴的な動物を挙げていただきたいのです。

大谷副園長 エゾリスについては、うちもエゾリスをやりますということではないですけれども、実際に野生のエゾリスが園内にも何カ所かに来ています。先ほど園長の方からも、冬の企画を検討しているということでありましたが、今はまだ正式には決まっていなくて、検討中なのですけれども、その中で、エゾリスの餌づけというか、せっかく来ているのだから、ヒマワリの種をあげたり、中に入れるような巣の小屋みたいなのを今からやらないと、おこもりに来たりということとはちょっと間に合わないの、それはすぐにやろうということになっています。

まずは、来るところにヒマワリをあげる場所をつくって、来るようになったら、今度は、今は円山自然塾という名前が候補として挙がっているのですが、市民や小学校の高学年とかを対象に、一緒に巣箱なりテーブルを、今はとにかくそれを来る場所に置くのだけでも、リスたちの行動を考えたら、どういうところが一番いいのだろうというようなことも、それぞれがお互いに勉強し合って、そして置いていくと。それは、動物園でふやすということではなくて、円山全体、この地区にエゾリスの個体をふやそうというようなことは、具体的にすぐに取りかかりましょうということになっています。

この中には、そういう細かい具体的な話は書いていません。

服部委員 以前、私がお話ししましたが、北海道神宮の門の上をのぞきますと、あそこにエゾリスがいつもちょこんと鎮座して、えさを食べています。

岡田委員 木道のところでも見かけたことがあります。

服部委員 もう至るところにいるのです。そういう意味では、円山エリアとしては、エゾリスを多様性動物として描いていく必要性はあるだろうと思います。

原田委員長 どういう生き物にするかというのは、これからまだいろいろと可能性がありますね。

金澤園長 先ほどありましたオオワシとかシマフクロウとかオオムラサキというのは、今はとりあえずそれをやっていて、だんだんふえていけば、次にまたかわっていく、それこそ固定した考えではないということは決まっています。

服部委員 モモンガでさえ、飛ばして外に出ていったっていいよというお考えを持っているのですよね。

原田委員長 ほかに、このところではありませんようでしたら、次に事業展開の方向性にまいりたいと思います。

このあたりはどうでしょうか。

「(ソフト)」と書いてあるのですが、お客様を引きつける努力をしますということと、メッセージを伝える努力をしますということと、効果的な事業展開をします、おもしろくて役に立つ動物園にしますということのようです。

山本委員 ブランドは、単年度でできるものではなくて、3年なり5年なりいろいろ積み重ねてできていくので、ここでは余りどうのこうのとやってもちょっとせんないところはあります。

一つ大事なのは、さっきパワーポイントを使ったご説明の中で、いろいろやっていて、今後もこういう計画があるとおっしゃっていたけれども、ばらばら散漫にやっているだけだと意味がなくて、それらが統合的に積み重なっていかなければなりません。ここでちょっと大事だなと思うのは、そういうことのマネジメントを統合的にするということが書いてあればいいのかなと思いつつながら先ほどお聞きしていました。そういうことが少し薄いかなと思うので、どこかでそういう表現を盛り込んでいただければと思います。

岡田委員 私も、これまで動物園に来なかった層を動物園に呼ぶためのイベントをこれまで積極的にやってこられたなというイメージがあります。ですから、もっとリピーターをふやすための学習的な要素の強いものを、これからはたくさんやっていかれることを期待します。

原委員 うまく言えないのですが、私は今回、このところをずっと見ていて自分で感じたのは、引きつけるために一生懸命やらなければならないことが課題となって大変ではないですか、重過ぎませんかということです。特に、期待感のおもしろくて役に立つ動物園というのを今の段階で前に出してしまうと、ちょっとつらくないですかという気がしてしまうのです。頑張れる人はいいのですが、長く先を見たときに、果たして続くのだろうかという心配が出てくるのです。その必要はなかったでしょうか。

笠委員 事情を知るだけに.....。

原委員 やらなければいけないこととやりたいことはすごくわかるのですが、現実的に、私は気持ちの中でとても窮屈感を感じていたのです。先ほどの説明を聞いていても、肩にのしかかっているものをすごく感じるのです。今、こういう展開をしていきますということを出して構わないと思いますが、ここでは、おもしろくとか、役に立つとか、ここまで具体的にしなくてもいいのかなと思ったのです。

金澤園長 すごく配慮のあるお言葉で、動物園としては非常に助かっているのです。しかし、これから動物園が生き続けていくためにはやらなければならないことなのです。ですから、きょう、あずにやるのではなくて、最初に課題がボンとありましたが、あの課題一つ一つ改善するのが、まさにこれにつながってくるのです。だから、簡単に言うと、やらなければならないことであって、こういうふうに持っていかなければ動物園が生き延び

られないのではないかと考えているのです。

山本委員 目指すものは、これなのですよ。

金澤園長 目指すものは、私もこれでいいのではないかと思います。

1回目にお話をしましたが、市民がどういう動物園を求めているかという、役に立つとか、おもしろいとか、学べるということが市民意識としてあるのです。それに乖離していくと、今、動物園として生き残れない時代でないかなという趣旨からも、こういうつくりにしたのです。

山本委員 ちょっと難しいのは、基本理念のところ「つなぐ」だ、「絆」だ、どうするこうするとあれだけ言ったのだけれども、ここでまたキャッチミたいなものが出てくるのは、若干危険を感じなくもないです。どっちなのかみたいになってしまうとちょっと怖いんです。これは、ちょっとメッセージが強いので、どこかにもぐらせてしまった方がいいかもしれません。

原委員 長い目で、こういうふうにしていくというのは大事なことだと思うのですが、こういうのが文章で出てしまいますと、どこがおもしろいのよと言われそうな気がするので、ちょっと怖いなと思います。やはり、1年、2年たったときに、おもしろいのを期待して来たのに、何も変わっていないではないか、まだやっていないのかというイメージを持たれるのもちょっと怖いなと思ったのです。

金澤園長 頭に10年後にはとつけますか。

原委員 中長期的にというのでしたらわかりますけれどもね。

金澤園長 やはり、基本構想ですから、長いスパンのものをつくって、その中で集中取組期間として短期で取り組めることと並行して書いてあるのです。だから、一番最初に出てくるのは、どうしても長いものです。そして、短期的なということで、集中取組期間という位置づけという長短にしてあるのです、全体は。だから、長い方には希望ということまで書かれているのです。

山本委員 なかなか難しいですね。

服部委員 事業展開の方向性を示していることですが、私は、これはこれで、考え方としては結構具体的に掘り下げてきたなと感じています。

では、これをどういうふうにしたらやれるのかというふうなことで、まさに園内の組織体制という問題まで触れてくると、ああ、やれるのだという期待感がしっかりと位置づけられるのかなと思います。そういう意味では、組織改革に対する考え方がどこにも出ていない。具体的には、経営開発室をつくるか、前もいろいろな話が出ていたとおり、組織をいじらなければならない部分もあるのではないかと、そこら辺までを基本構想の中で押さえておけば、やろうとしているのだなということが見えてくるのではないかと、思いますけれども、委員長、どうでしょうか。

原田委員長 私は、構想だから、方向性を示して、システムの考え方というか、先ほど一言おっしゃいましたけれども、イベント管理マネージャーというか、イベントを企画する

人は、よそからこういう人に頼んで、なかなかいいアイデアがどんどん出てくるなということはあるのですけれども、それを長続きさせて質を保つには、その管理マネジメントが必要なのです。そこを意外と忘れていて、最初はうまくいったのだけれども、次が続かないとか、息切れしてしまうとか、そのうち何も出てこなくなるということがあるのです。

円山も、この4月から随分頑張っていると思うのです。入場者も増えているという報道がありましたけれども、私は、ずっとそれで全力疾走していると、みんなエネルギーを使い果たしてくたびれ果ててしまって、先がなくなるのではないかと思います。だから、緩急をつけて、エネルギーをストックする時間もうまくとって、そういうマネジメントが必要なのではないかと思います。

私は、1年間やって、みんな疲労こんぱいで、もうアイデアはないよみたいにボロボロになってしまうということではなくて、こういうシステムでいけば安定的に維持できるなというような、まさにサスティナブルというアプローチをこの再生計画では主張していかなければいけないと思うのです。

ちょっと話を戻しますけれども、さっきからドナーとかサポーターというような話が出ていますが、入場料というのは非常にフローですので、それを基盤のところで安定させるためには、やはりドナーをきちんとふやしておく必要があります。そのためには、理念をはっきり打ち出して、フィードバックするサービスはこのように行うということを明確に表明しなければいけない。そういう信頼性に対して基金が寄せられるというようなシステムをきちんとつくるべきだろうと思うのです。それについても、マネジメントということが必要で、これからイベントを安定的に供給していくためにも、私はマネジメントが必要なのではないかという感じがするのです。

よくある例は、いろいろなアイデアをちりばめておいて、こんな動物園になりますよというけれども、一度それを公開してしまったら、2度目の価値というのは最初と同じようにはないのです。それを忘れてしまっているということがあります。つまり、そういうイベントをどうやって維持させていくことができるか、それが私はマネジメントの力であろうと思うのです。

確かに、そのあたりを事業展開の方向性としてしっかり記述しておく必要があるのではないかと思います。

山本委員 これは後の話ですが、18ページの一番最後で、もろもろを実現するための経営体制の確立ということで押さえているのです。ここに、数値管理、経営管理ということで、先ほど服部委員がおっしゃったことは、ある種、言及されているのです。ただ、例えば顧客、ターゲットも、3年、5年、10年たつとターゲティングが変わってきますので、顧客管理マネジメントとか、例えばイベント、コミュニケーションプロデュースマネジメントとか、この辺でそのことをわかっているということをまとめて書いておいてもいいかもしれません。

服部委員 私もそう思います。

原田委員長 なるほど。そういうふうに、そこではっきり書いておいていけばいいと思います。

山本委員 こういうところで触れているよりは、経営の体制のところを書いておいた方がクリアです。

原田委員長 わかりました。

服部委員 山本委員のおっしゃるとおりです。そういうふうにしましょう。

原田委員長 私は取り下げましょう。

それでは、ここは、事業展開をこのような方向性で行っていくということで、ほぼよろしいでしょうか。

魅力の発見と集客ターゲットと、新たなプロモーションと、関係性をつくり上げていくということと、ブランドの構築ということで、余り書かない方がいいのではないかとということもありますが、動物公園というブランドをつくり上げていくというのはあるかもしれませんね。余りほかにはないと思います。

高木委員 どこに入れたらいいのかわらないのですが、かかわる人材の育成みたいなことはどこかに明確に入っているのでしょうか。

だれがお客さんにサービスをするかということ考えたときに、動物なのかというのがありますね。やはり、動物園にかかわる人のキャラクターもつくっていかなければいけないと思うのです。イベントを企画するだけで表に出てこないではだめだと思うのです。

僕も、会議に出ていると、いつも高木さんは怖い顔をしているとみんなに言われるのですが、自分が現場へ行けば踊って歌ってやっているわけです。やはり、スタッフにキャラクターをつくっていくのはすごく大切で、現場の研修はしょっちゅうやっているのです。演劇の人を呼んできたり、よそを見にいかせたり、よそのガイドに出会わせたりということとは非常にやっています、それで自分のキャラクターをつくっていけと。

かかわる人材の育成みたいなものは、後ろの経営体制にそれにかかわることが書いてあると思いますけれども、そういった職員の育成にもコストをかけるということですね。その辺のことを、事業展開の方向性に入るのかどこに入るのかわかりませんが、どこかに入るといいなと思います。

原田委員長 大変いいご指摘だと思います。

服部委員 私もそう思います。あえて入れるとすれば、やはり経営体制の確立の付近でしょうね。人、物、金が経営の根幹ですから、人に対する教育といいますか……。

山本委員 18、19ページで、それぞれ部分的におっしゃったことに触れているところはありますが、今おっしゃったように人、物、金とするかどうかは別として、ちゃんと人のところで書いておいた方がいいのでしょうかね。

原委員 一番大事なところですね。

大谷委員 今の人材育成のところですが、以前、産官学協力の話が出たこともあるし、全部自前で人材を育成しようとか調達しようというのは無理があると思うので、ネットワ

ークの構築とか、外部との連携とか、そういうこともまとめて入れられたらどうでしょうか。

原田委員長 交流、連携ですね。

さっきのノルデンスアークも、スタッフが40名くらいしかいないのです。それで、50ヘクタールを管理しているのです。世界の主要な大学の教員と連携していて、必要とあらば、その専門家を呼び出して教えを請う、そういうシステムにしていますと言っていました。だから、専門家はそんなに多くはないのですよと言っていました。専門家はみんな外部にいるらしいです。それは、連携していないとすぐに応じてくれないので、連携契約をしているということでした。

大谷委員 それこそが、札幌の力が発揮できる場所だと思います。170人くらい獣医さんがいるようですし、大学もありますからね。

原田委員長 先ほど園長は、これから大いにそれを強化していくとおっしゃっています。

金澤園長 それがなければ、これからの動物園は成り立たなくなります。

原田委員長 全部雇うというわけにもいきませんからね。

金澤園長 それこそ、飼育のスタッフは直営でも、それ以外は外部の人を呼んでこななければ成り立たないです。

原田委員長 私は、旭山にも教わるところがあるのではないかと思います。いわゆるスタッフディベロプメントみたいな、内部的な現有している人材の研修をダイレクトにやってもらうというやり方も、私は大いにやっていいのではないかと考えています。

高木委員 それは理念のところにもつながると思います。「わたしの動物園」という視点の中に、研究者とかスペシャリストの人たちもかわりやすいといいますが、ボランティアと市民のことを浸透していく、これから大学との連携を実現していくとはっきりうたっていますけれども、研究者たちがボランティアでかわりながらも、自分たちの動物園だということを育成していく、そこに人材育成も絡めていくということだと思うのです。そういうふうにつながっているという言葉でうまく共有できるといいなと思います。

大学だけではないのです。大学の人たちのボランティアみたいにかかわって、みんなでお互いに学び合えるみたいな形ですね。

服部委員 教育の問題も入れていく必要性があります。教育というよりも、むしろ人材育成という観点です。

高木委員 みんながかかわって学べる場、そういうようなことです。

原田委員長 私は、環境教育というような、本当に小学校、中学校の担当教員を含めて、どういうプログラムにしていこうかという形でそれぞれレベルアップしていくということもあると思います。

原委員 飼育員の方々というのは、それぞれいろいろ連携をとって学んでいることが個々にあるかと思いますが、それは、園としての関連でなくて、あくまでも個人個人のつながりでできているのでしょうか。

金澤園長 両方あります。やはり、研修会とか研究会というつながりの中でやっている部分と、そういう中ででき上がったネットワークを個人的に、同じ種類の動物を飼育している人同士のネットワークですね。そういった情報交換が常に行われていますので、一人一人に聞けば別なネットワークかあると思います。

ところで、委員長、申しわけないのですが、ここは4時に開放したいのです。今は4時なのです。ここのプラザは、29日まで展示期間中なのです。

原田委員長 そうしますと、事業展開の方向性というところまではほぼやってまいりましたが、展示施設の方向性、持続可能な経営の方向性、それから単年度黒字経営を目指してという経営関係が残ってしまいました。どうしましょうか。

山本委員 メールでやりとりしませんか。

金澤園長 次の委員会は12月なのですが、それを前倒しするようなことも不可能ではありません。きょうお話を聞いた内容については、これから作業をやるので、できるだけ直すところは直して、一回、委員長とのすり合わせが必要になるとは思いますけれども、その辺の整理させていただきたいと思います。

それで、もし差し支えなければ、展示とか経営のところでご意見があるところをメールやファクスで先にいただいて、整理をかけてから皆さんにもう一回戻す方が効率的なのかなと思います。そして、うまくやると、11月と12月の間くらいで早目に持っていけば、皆さんのご都合で整理がつくかと思います。

あとは、申しわけないのですが、委員長の負担になってしまいます。私たちと委員長で議論しなければならないかもしれません。

服部委員 それでいいのではないのでしょうか。詳細な問題については、委員長が.....。

原田委員長 かなり重要なところをついてきましたので、ほぼいけるのではないかと考えております。

それでは、今、園長からご提案がありましたように、残った課題、ナンバーでいうと7番、ページでいうと13ページ以降につきまして、ご意見のある方はどしどしファクスあるいはメールで送っていただきたいと思います。

送り先はどちらがよろしいですか。

金澤園長 北川係長の方をお願いします。

原田委員長 それでは、それで送っていただきたいと思います。

そういうことでよろしいでしょうか。

(「異議なし」と発言する者あり)

原田委員長 その内容等を含めて、園長と委員長間でいろいろと検討をさせていただきます。それをそれぞれの委員にフィードバックさせるという形にさせていただきます。

そうすると、次回はどうなりましょうか。

金澤園長 そういう意味で、次回につきましては、委員長との話し合いの内容によって、もう一回日程調整をさせていただきたいと思います。今、基本的には12月を考えていま

すけれども、場合によってはちょっと早くなるかもしれません。

原田委員長 それでは、また改めてご連絡をするということですね。

そういうことでよろしいでしょうか。

(「異議なし」と発言する者あり)

3. 閉 会

金澤園長 それでは、きょうは長時間にわたりまして、どうもありがとうございました。

以 上